

ブルキナ・ファソ農村における女性の住民組織に関する地域研究

平成 20 年入学
カメルーン・フィールドスクール
調査国：ブルキナ・ファソ
神代ちひろ

キーワード：住民組織, 現金稼得, マイクロファイナンス、開発援助、女性

自分の研究テーマについて

現代アフリカ農村における住民組織に関する研究では、住民組織は地域住民の参加を前提とした開発の道具ととらえられたり、地域発展の手段としてのその有効性が注目されてきた。特に近年では「ジェンダーと開発」の概念を背景に、女性住民組織の活動が盛んになってきている。女性が組織化され、女性のエンパワーメントを意図したマイクロファイナンス(MF)の利用も広く進められている。しかしその半面、女性を MF 漬けにさせており、逆に女性の生活に支障を与えているという批判もある。これまで、ブルキナ・ファソ農村において、開発援助がきっかけとなり組織された女性の住民組織ハナーミを事例に、組織の活動の実態について明らかにしてきた。ハナーミは、一般に向けた開発援助に関する告知を契機に自発的に組織され、資金援助を活用して活動を拡大させてきた。活動のひとつである MF の利用では、ハナーミが高い返済率を背景に繰り返しクレジットの融資を受けてきたこと、融資元に対する交渉で一定の効果をあげてきたこと、自己資金のみでクレジットを管理・運営していることがわかった。ハナーミは開発援助を機に設立された組織であり、その後も開発援助を受けて発展してきた。しかしその設立経緯や活動の様子から、ハナーミが開発援助に迎合せず、自ら考え、活動の運営をおこなってきたことがこれまでの研究で明らかになった。



写真 1. [ブルキナ・ファソ] ハナーミの集会
一葉菜をちぎり、おしゃべりをしながらすごす。

フィールドスクールから得られた知見について

演習の一環で、カメルーン東部のアンドン村において国際熱帯農業研究所(IITA)が行うキャッサバの栽培・加工・利用に関する農村開発プロジェクトを訪問した。このプロジェクトは、女性の住民組織が協力のもと、キャッサバの在来種に加えて改良種を実験的に栽培し、収量の多さからその土地に向けた品種を明らかにすることを目的として行われている。育てたキャッサバは、クスクスやバトンという料理に加工され、消費・販売される。組織のメンバーのひとりが、販売して稼いだ金は、他のプロジェクトに使用したり組織内のメンバーで分配して子どもの学費にあてると、見学した畑への道すが

ら話してくれた。また、彼女らの組織は約 15 年前に村で活動を開始したという。はじめはトンチン（頼母子講）の活動をしていたらしい。もともと存在していた組織に対して近年援助が入り、キャッサバ栽培活動が加わったようだった。

今回の訪問で非常に残念だったことは、IITA 側の話は多く聞けたが、それらを実際に行っている女性の住民組織のメンバーとゆっくり話をする時間がなかったことだ。唯一話ができたのが、一列で進んだ畑への道中であつた。しかしそれは、私が同行してくれた組織メンバーのすぐ後ろを歩いていたこと、彼女がフランス語の話者であつたことという偶然が重なり実現した。短い時間であつたが、組織メンバーと直接話ができて、稼いだお金の使いみちや組織の成り立ちについて聞いたことはとても貴重であつた。彼女たちの生の声は日本でプロジェクト報告書を読んでもなかなか聞こえてこない。もし次回このような機会があつた場合、きっと短い時間にはなるが、その中で彼女たちの本音を少しでも聞き出せるような関係を築き、話ができるようより高い意識でのぞみたい。



写真 2. [カメルーン] メンバーの背を追いかけて
—メンバー 3 名が同行し、キャッサバ畑へむかう。

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

アンドン村に到着した際、7 つの住民組織がそれぞれ自分の組織名をフランス語で記した看板を掲げ、大きな声で「心につなぎとめる」という意の歌を歌い、踊りながら迎えてくれた。そのうち 4 つは女性組織であり、組織ごとにそろいの服を着ていた。それぞれ孤児に関する活動を行う組織や、キャッサバの品種改良プロジェクトに関わる組織など、それぞれ活動内容は異なっていた。

ブルキナ・ファソにおける調査村には 13 の女性住民組織が存在するが、どの組織も自組織の看板を持たず、必ずしもそろいの服を持たない。調査村と比べて、私たちがコスチュームに身を包み、祭のように歓迎してくれる様子は、彼女たちが援助慣れをしていることをうかがわせた。実際各組織は、それぞれ開発援助と結びつき、プロジェクトを進めているらしい。

今回の実地演習で、地域によって住民組織のキャラクターが異なるということに身を持って気付かされた。背景にある社会構造や文化、歴史によって、もともと存在する在来の組織も異なれば住民組織の存在意義も異なってくる。今後は、地域による特性をより意識しながら研究を進めていきたい。



写真 3. [カメルーン] 住民組織による歓迎



写真 4. [ブルキナ・ファソ] ハナーミによる役人の歓迎